

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4079900223
法人名	社会福祉法人 鷹羽会
事業所名	グループホーム しじみ苑A棟
所在地	福岡県田川郡大任町今任原3485-1
自己評価作成日	平成27年8月6日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 アーバン・マトリックス 福祉評価センター		
所在地	福岡県北九州市戸畑区境川一丁目7番6号		
訪問調査日	平成27年10月2日	評価結果確定日	平成28年2月3日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

大任町の小高い丘陵地にあり、周囲の山並みが望める展望の良い環境の中に立地されている。近隣には小学校があり、子供達の元気な声や運動会の練習などでは太鼓の音などが聞こえ、季節的には運動会や入学式や卒業式などの招待を受けたりと交流が図れている。また、中学校では職場体験学習を受け入れ地域との馴染みの関係作り、親近感のある明るく楽しい賑やかな施設作りを心掛けている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設して11年目を迎えているグループホームしじみ苑は、隣接する同法人ケアハウスや新たに開設された特別養護老人ホームとともに、高台にある広大な敷地内に位置している。法人内の連携は、職員育成や日常的な交流、災害対策等に発揮され、合同行事の一つであるバーベキュー大会では、家族や地域住民、ボランティアの方々を含め、総勢300人ほどの参加を予定している。運営推進会議には、行政職員及び地域包括支援センター担当者の出席を得ており、日常の取り組みを伝えながら、開かれた事業運営に努めている。入居者、職員共に感情表現豊かな関係性が築かれ、普段着のまま過ごせる安心感が伝わってくる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○	1. ほぼ全ての利用者の	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○	1. 毎日ある	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)		1. ほぼ全ての利用者が	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○	1. ほぼ全ての利用者が	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	鷹羽会の理念である「ひとりはおみんなのために、みんなはひとりのために」を理解し、利用者の家族との関係を築き、連携を図りながら利用者の生活を家族も一緒に協力しながら支援している。	理念は、リビングのテレビの上に掲示されているため、自然に目に入ってくる。理念に基づき、互いに認め合い、尊重しあえる関係づくりを大切にしている。日常の中でも、利用者同士で理念に照らし合わせ、意見の相違をまとめることもある。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近隣には保育園や小学校があり、また地域の馴染みの住民も生活されているので地域の行事の際は交流が図れている。また、小学校より運動会や始業式、卒業式には招待状が届き見学に出掛けたり、文化祭へ作品出品をしたりと地域の一員として日常的に交流を図っている。	近隣の小学校の行事に出かけたり、中学生が事業所を訪れて交流する機会がある。また、学生手作りの表札が各居室に掛けられている。地域の文化祭への出展や敬老会には参加している。法人内の事業所が合同で行なうバーベキュー大会では、毎年、家族やボランティアを含めて300名程の参加を得ている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	特別な取り組みは敢えてしていないが、運営推進会議などを通して行政や地域包括支援センターの職員の方々と共に連携が構築されているので上手く連携を図りながら地域貢献に結びつけていきたいと考えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は行政職員、地域包括支援センター、地区の代表、家族で構成されており、2ヶ月に1回開催されている。行事報告や事故報告等、困難事例などでは意見を求めたりとサービスの向上に繋がれるように努めている。	運営推進会議は2ヶ月に1回開催されている。家族や地域の代表、地域包括支援センター、行政職員等の出席を得ている。利用者の状況や行事、ヒヤリハット等の事例を報告し、意見をいただき、サービス向上につなげている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	顔馴染みの関係ともあり、運営推進会議以外にも不明な事などがあれば気さくに相談したり、協力を求めたりと関係が築け連携が図れるように取り組んでいる。	運営推進会議には、行政や地域包括支援センターの職員の出席を得ている。日ごろから、不明な点の問い合わせや情報の共有に努めている。制度に係る変更事項がある時は、行政から説明してもらっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束に関して職員に十分理解をしてもらい安易な拘束はしないケアを心掛けている。困難事例に関してはミーティングなどで何度も話し合い、家族の意向も聞き話し合いながら拘束せず見守るケアに努めている。	個別の状況や暮らし方にあわせて、環境整備の工夫や個別の距離感を意識した見守りを行う等、その方にとってのより良いケアを検討している。言葉による抑制についても意識を持ち、職員間で振り返る機会を持っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	2ヶ月に1度、内部研修や外部研修などで虐待防止について認識しているが状況に応じミーティング以外でも職員同士でその都度話し合う機会を設けている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	今までに制度を活用している人がいないが、研修で成年後見制度や権利擁護については学ぶ機会を設けている。また、外部に向けて資料等を常時閲覧できるよう情報提供を行っている。	権利擁護に関する制度について、外部研修参加や内部での伝達を通じて、職員の理解を深めている。資料を整備し、必要時には情報提供を行える体制である。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	不安を抱えているのは利用者のみならず家族も同様であると考えているので、場の雰囲気作りに気をつけ何でも相談できるような話しやすい環境作りに努めている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会は日頃からこまめにあり、家族には利用者の状況報告を行い今の利用者の状況に理解を得ている。家族の意見や要望はほとんどん言ってもらい、その都度職員と話し合って情報を共有し運営に反映させている。	行事への家族の出席率が高く、また日頃から家族の訪問が多いので、その都度利用者の状況を報告したり、意見や要望の収集に努めている。出された情報は職員間で共有し、運営への反映に努めている。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	運営に関して、現場は職員がメインで動いているのでその職員の意見や提案は貴重なものとして何でも言ってもらえるような環境作り、機会を設けている。	月に1回、ミーティングを実施しており、活発な意見交換がなされている。また、毎日午後の時間帯で、職員がケアで感じることを、皆で考える機会を設けている。出された意見を前向きに運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は資格取得など職員のスキルアップを促している。職員の努力や実績を認め、定期的な把握にも努めている。就業規則に沿って、オーバーワークにならないように指導している。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	募集や採用については、年齢や性別の等の制限はなく、ヘルパー2級取得を基本としている。また、産休や育児休暇後の復帰に際しての支援なども非常に働きやすい環境作りに取り組んでおり職員の意見を聞いてくれたりと配慮している。	職員の定着率は高く、採用にあたって年齢や性別による排除は行わないようにしている。休憩時間の確保や、有給休暇、産休の取得にも配慮し、働きやすい職場環境づくりに努めている。また、研修参加を推奨しており、年1回全職員が外部研修を受講するよう決めている。職員間の和を保つよう法人全体のボーリング大会も予定している。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	人権研修としての受講機会は少ないが、外部研修のみならず、内部研修でも人権について取り組む必要があると思う。参加機会があれば取り組んで意識向上や理解に努めたい。	人権研修がある時は参加し、意識の向上や理解に努めている。研修後内部で話し合っ、実践上の課題についても検討している。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	個々に応じた研修参加を促し参加するように伝えている。また、内部研修等で発表し職員全体が共有できるように取り組んでいる。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	今年から、田川地区の専門部会が発足され、それ以外にも同じ大任地区での同業種のケアマネ連絡会も発足しネットワーク作りや勉強会、事例検討や活動を通じてサービスの質の向上に取り組んでいる。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所当初は本人も家族も慣れない環境に不安を抱いているので、まずは双方の要望や心配事などに傾聴しその人らしさを見つけ、他者との関係が上手く築けていけるようにフォローしながら信頼関係が築けるように努めている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人だけではなく、家族自身も慣れない新しい環境に不安感を抱いていると思うので、コミュニケーションを大切に何でも離せる雰囲気作りを心掛け、些細な事でも話してもらえるように信頼関係を築いている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事前面接では中々十分な情報は得られないので、その都度家族へ状況報告を行っており、その上で気になる事などは情報を家族から得ながらサービス提供の際に反映できるように対応している。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	生活の主体は利用者であり、職員は利用者からすれば環境の一部である事を認識してもらい職員主体、業務主体にならないようにミーティング以外にも日頃職員間で話しをし理解するように努めている。		
21		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	認知症高齢者にとって、ケアを提供する際に家族は共に支え合っていくのに必要な存在である。まずは信頼関係を築く事を第一にコミュニケーションを図り連携がとれるような関係作りを心がけている。		
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	定期的に家族の面会がある。外泊はないが、外出は勧めている。隣設のケアハウスや特養へ合同行事の際は顔馴染みの人もおり交流を図る機会がある。それ以外に地域行事への参加を利用し、地域住民との交流も図っており途切れないように支援している。	家族や友人の面会があり、職員は出来るだけ人々が訪問しやすい雰囲気づくりをしている。近隣のケアハウスや特別養護老人ホームに知人がいる方もあるので、職員が同行して交流する機会を設けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず に利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に 努めている	日中は居室に閉じこもる事もなく、全員がリビング にて過ごしている。生活歴も長くなると合う合わない がありトラブルになる事もあるが、職員が上手く間に 入り孤立しないようにフォローしている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性 を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過を フォローし、相談や支援に努めている	退所しても関係がそこで終わるのではなく、またいつ か何かの縁でいつでも遠慮なく相談に乗る事を伝え、 いつでも連絡をしてきていただきたい事を伝えている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に 努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	今までの生活歴や性格など、コミュニケーションや日常 生活の様子から見いだすように努めている。中々本人の 意向というのが得られないのが現状だが、極力意向に 沿うように努めている。	入居の早い時期に、本人から生活歴や思い、希望等を 聞き取りしている。本人が意思表示されない時は、表 情や仕草から汲み取ろうと努めている。家族の方にも 協力をいただいている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、 これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	その人らしさを把握する為、本人や家族から得られ る情報を収集したりして経過等の把握に努めている。		
27		○暮らしの現状の把握	日常生活の様子を見ているので、日頃と何かいつもと 様子が違っていたり、何か気づいた事など、些細な事は ケース記録に記載したり、情報を共有したりして現状の 把握に努めている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方につ いて、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞ れの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を 作成している	現状は本人からの要望等は殆どなく、家族からも余 り無い。日常生活の様子から見えてくる課題や現状の ケアの在り方に対し、担当者会議等で情報を検討し共 有しながらモニタリングを実施し、見直し等を行い介 護計画を作成している。	本人や家族の意思を確認しながら、職員と計画作成 担当者、管理者らがミーティングで話し合い介護計画 書を作成している。モニタリングの実施とケアチェッ ク表等から次の計画につなげていることが理解でき、 記録はわかりやすく整理されている。	
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別 記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介 護計画の見直しに活かしている	日常生活の様子はあった事などは些細な事でもケー ス記録に記載するよう徹底しており、毎月利用者につ いてミーティング時に話し合いをしている。職員間か ら見える気づきなどもあるので上手くモニタリングに 反映させて見直しに活かしている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	環境の変化や持病からくる季節的な体調変化や体調不良に対しその都度利用者にとって一番ベストな方法で対応ができるよう家族には状況報告をしながら協力を得て支援できるように取り組んでいる。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	苑で生活する利用者は人それぞれであるが、馴染みの環境や関係が途切れないように、かかりつけ医や行きつけの美容院、最寄りの道の駅へ外出したりと希望する場所へ外出したりして楽しむ事ができるように支援している。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前から利用している医療機関に関してはそのまま継続できるよう本人・家族の意向に沿って受けられるよう支援している。日常生活に支障をきたすような生活変化が生じた際は適切と思われる医療機関への受診を家族に事前に状況報告を行いながら把握していただいている。	入居前からのかかりつけ医との関係を大切に受診している。家族の同行を原則としているが、緊急時には職員が同行している。複数の医療機関と連携を図り、適切な医療が受けられるよう支援している。訪問看護が週1回来訪している。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎週水曜日に訪問看護が来苑。日常生活の様子で聞きたい事や相談事を何でも伝えて指示をもらっている。夜間帯でも24時間連絡が取れるように連携が図れており適切な指示や看護による処置など受けている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時にはソーシャルワーカーや専門スタッフに必要な情報提供を行い、施設側と家族側の意向も踏まえて早期退院ができるように連携を図り対応している。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に重度化した場合や終末期の在り方について指針をあげており指針をもとに家族に説明を意向確認と同意を得ている。現時点で看取りケアにまだ携わっていないが、加齢と共に心身の低下や重度化していくので看取りに関して職員全体がしっかりと受け入れる心構えが出来るように取り組んでいる。	入居時の際に、重度化や終末期に向けた方針を家族に説明して了承を得ている。今後想定される終末期の支援について、24時間対応の医療機関との連携を課題としている。希望や状態に変化があった際には、その都度、本人、家族の意向の把握や、医師や看護師、職員の意見を確認しながら、方針の共有に努めている。	
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急救命講習や内外部研修に於いて応急処置や対応が出来るように急変や事故発生時には迅速に実践が出来ている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署の協力のもと、年2回の通報・避難・消防訓練を実施。また、隣接のケアハウスとの連携も図っている。	昼夜を想定し、年2回、避難訓練を実施している。訓練後には法人内合同で、消火器の使い方について確認している。火災以外の災害についても、停電時の断水に備えて浴槽の水を残す等の検討も行われている。	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	意志や感情を表現出来るよう喜怒哀楽を大切に職員と利用者間で共有している。入居期間も長い人で9～10年近くになる方もいて馴染みの関係が築けているが、時には喧嘩もあり。その後のフォローをする配慮や対応を心掛けている。	マナーや接遇について、内外の研修の機会を確保し、職員の意識を高めている。居室内への視線についても、ベッドの位置やガラス部分への工夫を行い、プライバシー空間として配慮している。喜怒哀楽の表出の場面を大切に与えながら、個人の尊重とプライバシーの確保に努めている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の意志を尊重し、遠慮せず些細な事でも言ってもらえるような雰囲気作りを心掛けている。日頃の様子で些細な事があればこちらから声を掛け本人の感情や思いを引き出して上げられるように働きかけている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者の心身の状況や職員の勤務体制によっては必ずしも希望に添えない事もあるが、基本、利用者主体であることは職員に認識してもらい個人個人の生活スタイルを尊重しペースを大切に無理強いする事が無いように気をつけている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者によってはお化粧をされる方もおり、個人で化粧の購入をされる方もいるので注文をしたり、購入したり、洋服を購入する場合は職員が見た立て本人の希望に沿いながら買い物をしたりと身だしなみができるよう支援している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節感を感じてもらう為に季節物の食材を取り入れている。誕生会などの行事の際は利用者に食べたい物を聞き希望に沿ったものを取り入れて提供している。役割提供で食材の下ごしらえなどは利用者に手伝ってもらい支援している。	食材は週1回まとめて買出しに行き、他の必要品はその都度買物に出かけている。早出の職員が中心となり調理し、食事は野菜を多く使用し、季節感ある食材を使用している。利用者も自分の出来ることは手伝っている。特別食を作ったり、外食に出かけたり、好みのものをリクエストしたりと楽しく過ごしている。	
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の健康チェックや水分や排泄などのパターンシートを作成。水分量や食事量などはすぐに把握出来るようにしている。病院からの指示や疾病によって主食の量を決め、肉と魚をバランス良く取り入れ食事作りをしている。アレルギー等で食べられない食材は別の物で対応し個々の対応を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後は必ず歯磨きをし、夜は義歯に関しては洗浄剤で消毒をしている。個人の口腔内を確認し、何か異常や本人から不具合があった際は週に1度訪問歯科が来苑し、口腔ケアや治療を行ったりと清潔の保持に努めている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンシートを作成。随時・定時で誘導。その際失禁確認や排泄パターンの把握を行っている。出来る事は極力自己で行っていただき、状況に応じて見守り・一部介助を行っている。	排泄チェック表で個別のパターンを把握し、日中は基本的にトイレ誘導している。プライバシーに配慮しながら個別の見守りを行い、過剰支援とならないように心がけている。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	訪問看護の指導のもと、排便-2日の時点で緩下剤によるコントロールを行っている。水分補給や緩下剤の種類によっては効能が違うので、薬の種類を把握し便秘予防に取り組んでいる。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	2グループに分け、1日おきの入浴支援を行っている。利用者のレベルによって入浴の時間を確認し全員ではないが、極力個々に沿った支援を行っている。	二日に1回の入浴を基本としているが、その日の体調や気分によって入浴を望まない人には、工夫しながら柔軟に対応している。できる限りお湯に浸かれるよう支援している。どうしても拒否される方には、清潔保持に配慮し清拭等にて対応することもある。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者の殆どがリビングで過ごされて活動をし過ごしている。昼食後は下肢浮腫軽減のため、ベッドで臥床して挙上を行い1時間ほど休んで頂く時間を設けている。利用者の体調などによっては休自覚がない方でもバイタル的に、日頃の様子に変化が生じる時はベッドで休んでいただくよう対応している。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の処方箋をすぐ職員が確認出来る所にファイル化しており、薬の変更等はケース記録に記載し申し送り職員に伝達するなどの対応を行っている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	加齢に伴い、今まで出来ていた事が出来なくなったり、意欲の低下でなかなか楽しみ事を見いだせないでいる状態。それでも利用者の能力に応じて役割提供や行事ごとでは利用者へ直接食べ物のアンケートを行い利用者の思いを尊重した食事を提供したりと工夫をしている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	利用者によっては、家族が病院受診をされる方もいて、受診後に外食をして自宅に外出されたり、職員同行して希望する箇所へ買い物支援をしたりと希望に添うように調整して支援している。	個別の外出が支援できるよう調整している。また家族との連携を図りながら、外食や買物に出かけたりしている。高台にある広い敷地内からは、周囲の自然も見渡せ、気軽に外気浴ができる環境である。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在、金銭を管理している方は1名のみで他は施設が管理している。自己管理が可能と判断した方に対しては所持可能である。以前管理されていて、金銭のやりとりなどの問題が出た際に家族に説明し預かり対応にってもらって事がある。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の要望があれば、電話を掛ける支援を行っている。手紙は例がないが、ハガキが来て電話連絡をして取り次いだり、品物を宅配便で送る手続きをしたりと出来る限り支援している。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	環境的にはウッド調で吹き抜けの開放感ある明るい空間となっている。空調は職員中心にならないよう利用者に配慮しながら確認して温度調整をしている。また、声のトーンに気をつけるよう職員には注意を投げかけている。	建物は天井が高く、明るく、開放感溢れている。観葉植物や行事の写真が沢山飾られ、ソファやテレビの置かれたゆったりした空間は個々のくつろぎの場である。リビングからも外の季節の移り変わりを眺めることが出来る。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	昼食後に1～2時間程度臥床時間を設けているが、それ以外ではみなさんリビングで過ごしており、皆思い思いで過ごされている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	備え付けのベッド以外はタンスやテーブルなど馴染みのある物を持ってきてもらうよう説明している。家族の写真やレク活動で作成した作品などを飾ったりと居心地良く過ごされている。	入り口に表札を掲げた居室には、広い大きな収納棚とベッドが用意され、それぞれに、仏壇や使い慣れた筆筒、テレビ、化粧品、写真等を持ち込まれ、居心地よく過ごせるよう配慮されている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の出来る事出来ない事を認識し、その人に見合った自立支援やある程度の見守りを行っている。		